

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑨

今回の資料は、1996 採集した。採集地は、付近(平成8)年に館に寄託された瀬戸焼瓶子(へいじ)、筒形土器、常滑焼壺(つぼ)で、55(昭和30)年ごろに旧周桑郡丹原町(現西条市)の方が同町明穂の丘陵斜面を開墾していた際に発見、

採集地は、付近に安養寺(高野山真言宗)があることから安養寺遺跡と呼ばれ、中山川南岸の標高約100mの丘陵に立地し、現在は松山自動車道の敷地となっている。発見者によると、多数の

緑泥片岩が縦約1m、横約7m、高さ約0.5mにわたり積み上げられ、その上に五輪塔が散乱していたそう。石積の下には常滑焼の甕(かめ)や壺が並べられ、その一つに土師(はじ)質の筒形土器が入っており、その横に瀬戸焼瓶子があったという。

それぞれを見ていくと、瀬戸焼瓶子は現在の愛知県瀬戸市近辺で作られ、黄緑色の灰釉(かいゆう)がかか

経塚造営の際に使用か

安養寺には後世の記録に、「故代諸旧記之集録」という史料が残る。この中に文禄年間(1592~96年)

っている。土師質の筒形土器は、底に3カ所、焼成前にあけた穴があり、粘土紐(ひも)の輪積みにより成形されている。常滑焼壺は同県の知多半島で作られ、一部に暗緑色の自然釉がかかっている。これらは、いずれも13世紀ごろのものと考えられ、出土状況から経塚に使用されたと思われる。経塚とは、釈迦(しゃか)入滅後、世の中が乱れると考えられた末法の世にその教えを伝えるため、書写し

安養寺遺跡の陶器・土器



左から、瀬戸焼瓶子(高さ28.5㍉、最大幅16.8㍉、口径5.4㍉、底径8.6㍉)、常滑焼壺(高さ39.1㍉・最大幅37㍉、口径20㍉、底径12㍉)、筒形土器(高さ28㍉、口径8.2㍉、底径10.4㍉)

〈随時掲載します〉